

自立と共生！

たくましい日本！

No. 182号

民主党 中川正春の **永田町かわら版**

2003年1月27日

〒100-8981千代田区永田町2-2-1 衆議院第一議員会館 428号

<http://www.MASAHARU.GR.JP>

TEL 03-3508-7128

FAX 03-3508-3428

E-mail g03063@shugiin.go.jp

**○中国、北朝鮮国境地帯を行く**

## その3

やっと飛び立った飛行機は、満席。空港の待合所で出会った、日本大学の畜産の免疫学を研究しているという先生や、延辺大学から彼を迎えにきた元留学生の助教授も一緒でした。どこの国に出かけても、気がつくことは、一番に国際交流の進んでいるのが大学の世界だという事。日本にとって、辺境の地だと思っていた延吉は、彼らの学術の世界では、案外近いのです。

飛行場に到着して、ビックリしました。「中川正春先生」と書かれた大きなプラカードをもって、いかにも真面目な役人だという感じの男性が、出迎えてくれたのです。沈在成、延辺朝鮮族自治州外事弁公室、領事所長と書かれた名刺が差し出されました。日本を出発間際の中国大使館からの話、「今回は、中国当局としては、中川先生の身の安全は保障しませんが、それでもよかったですら行ってください。」と言う冷たい言葉で覚悟が出来ていたものだから、てっきり中国公安当局からのお出ましかと思ったものです。「昨晚、北京の中央政府当局から連絡が入って、中川先生を歓迎して、私達で、できるだけ丁寧におもてなしするように、ということでした。」と、言ってくれます。同時に、一緒にカメラを回しているフジテレビのクルーには、「あなた達の取材については、北京から何も聞いていないし、許可を取ってきた形跡もないから、この先の同行はだめだ。」と言い出しました。ここから、マスコミと延辺州の役人達との困った戦いが始まるのです。

建物の外は、氷点下30度の世界。外気を吸い込んだとたん、ウツと胸が詰まる感じになります。薄ら寒いホテルのロビーで、マスコミ取材について、もう一回交渉。改めて、翌日の朝、北京に私の意志を伝え、問い合わせた上で、対応したいという沈さんの生真面

とした内容が一つを除いて大方満たされています。延辺大学の朝鮮韓国問題研究所、所長の高敬洙氏、延辺州副州長の西門順基氏と担当部署の許正淋、外事弁公室主任などとの会見。ここまでは、すんなり計画を組んでありました。しかし、実際に国境を流れるトマン江の国境をまたぐ橋をおとずれ、そこから自由に行動させてもらって、地元住民に聞き取りをしたいとの申し出には、無回答。改めてただすと、国境までは行くが、マスコミはだめ。一般住民は、聞いてもこれといった話はないだろうから、代わりに我々(外事弁公室の役人)が答えると言います。「私達は、北京から指示を受けた以外のことは出来ません。余計な事をしたら首です。分かってください。」これが、彼らの口癖になってきました。押し問答をしても埒があかず、ここでやっと地元の役人がなぜ丁寧に迎えに来て世話を焼くのか分かりました。私達が、余計な事をしないための見張り役です。当初、生真面目そうに見えていた沈さんの顔が、この辺から、悪党の面相に見えてきたものでした。〔次回に続く〕

**○知事選挙への決断****県民が選ぶ選択肢をつくる**

知事選挙の候補者選びで、大変な目にあっています。財務省をやめて、一人で三重県の中を行脚している、前の県総務部長の村尾さんの他に、松阪市の現市長、野呂昭彦さんが手を上げる態勢になってきました。この人も、八年前に私達と一緒に激しい選挙を戦い、北川知事誕生を実現した仲間です。

民主、自由、社民の各政党や、県議会の新政みえの議員達、そして連合が協力してつくる「選考委員会」で、この二人に絞り込んで大激論をやっています。今は、意見が割れています、決まれば皆

目な顔を後にした時は、午前1時を過ぎていました。部屋の中は、思いのほか快適で暖かった事が、何よりでした。

翌日の天気は快晴。身に突き刺さるような風の中、人々は平気な顔をして歩いています。朝からのスケジュールは、予め私の方からリクエス

協力する。民主党が、一番批判されたあの、バラバラ状態(皆で決めても、最後までそれに従わず批判する)になっては、三重県がもたないから、論を尽くして、決まれば協力しよう。こんなことを、自分に言い聞かせて、頑張っています。この2、3日で結論が出ます。

中川正春